

# 創作ダンスの作品創作および発表の過程において 学生は何を学ぶか

田中 望\*・石川美樹\*\*

## 1. はじめに

創作ダンスが問題解決型の特徴を持った学習形態であることを舞踊研究者たちは長年発信してきた。それは、歌唱遊戯や行進遊戯、教師の作った既成作品を踊ることが中心教材だった戦前から、戦後のダンス学習の中心は“創作”へと転換されたことによる。八木(2016)によれば、ダンス学習は終戦直後から創造性や個性に着目し、1960年代後半にはすでに課題学習の理念が研究・実践されてきたことが報告されている。また、村田(2008)は、ダンス学習の特徴は「心身の開放」と「身体的コミュニケーション」であり、ゴールフリーな探求型・遠心型学習を基本とした「今、ここ」から始まって常に生み出していく学習(課題解決学習)が原点となると説明している。そして、ダンス学習は「習得・活用・探求」の授業をつくりやすい領域であることを示唆した。現在では多くの効果的な授業実践が報告され、更なる探求が進められている。その一方で、中学および高等学校における舞踊専門外の体育教員が有するダンス授業への意識は必ずしもポジティブなものではないことが報告されている(茅野, 2013、松本ら, 2013)。加えて、生徒がダンスに対する苦手意識を持っている場合も少なくない。したがって、保健体育教員の養成においてもこの点を踏まえたダンス教育が必要になる。

本学スポーツ健康科学部では教職課程科目の一つとして、ダンスに関する知識と技能を身に付けるために「スポーツ方法学実習(ダンス)」が開講されている。この授業において、学生は学習指導要領に示された3つのダンスの基本的な知識と技能を習得することを目指す。加えて重要なことはダンス学習の特徴やダンスの本質を考えることである。本稿では、「スポーツ方法学実習(ダンス)」において実施した創作ダンスの作品創作活動に着目し、教師を目指す学生が自らの体験を通してダンス学習の特徴をいかに捉えたかを明らかにすることを目的に、学生の講義後のレポートを読み解く。そして、それを学生が自身の指導実践に生かすことができる資料としての活用を目指すこととする。

## 2. 授業概要

### 2-1. 授業対象

「スポーツ方法学実習(ダンス)」は中学・高等学校の保健体育教員養成に必須の授業であり、3年次の春学期に開講されている。実技および知識の習得に主眼が置かれており、履修者のおよそ9割が教員免許取得希望者(教育コースの学生)である。そして、残りの約1割は他コース(健康トレーナーコースもしくはスポーツコーチコース)であるがダンスに興味を持ち受講を希望した者である。なお、他コースの学生に対しては本授業が教員養成を目的にしたものであることを説明し、了承したうえで受講するよう求めている。開講形態はクラス分け・3クラス編成となっており、2名の教員で分担している。なお、本稿では筆頭著者が担当した1クラスを対象とした報告を行うこととする。

---

\* 東海学園大学スポーツ健康科学部、\*\* 東海学園大学スポーツ健康科学部非常勤講師

## 2-2. 授業内容

学習指導要領「G.ダンス」に示された3つの内容を行った。つまり、「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」である。本授業ではこれらの知識と技能を身に付けることに主眼を置き、ダンスの本質的な活動内容である「踊る」、「創る」、「発表する・見る」活動を取り入れた授業を展開した。15週の構成は、第1週～4週を「現代的なリズムのダンス」、第5・6週を「フォークダンス」、第7週～14週を「創作ダンス」、第15週を「鑑賞と評価」とした。ダンスに関する知識については各週授業の導入部分において講義した。具体的な内容は、学習指導要領の内容、それぞれのダンスの歴史や音楽（リズム、カウント）の理解、ダンスに関する用語の理解および各週の授業に関連する内容についてであった。また、ダンスの技能については、「教師として踊ることのできる身体」について考え、それを目指すように求めた。

## 2-3. 創作ダンスのグループ創作および発表までの授業展開

### 2-3-1. 「現代的なリズムのダンス」および「フォークダンス」の経験

本講義の最初の段階では「現代的なリズムのダンス」を行った。その理由は次の2つである。1つ目は踊る楽しさを感じやすいこと、2つ目は学生の能力に応じた創作課題を出しやすく、学生も取り組みやすいことである。実技の内容としては、①ペアでの交流（一定カウントのフレーズを覚えペアで向き合って踊る。ペアはどんどん変えていく）、②教師の振り付けを覚えて踊る、③グループ活動、という内容で構成した。③のグループ活動では、②で振り付けられた定型の振り付けをお互いに確認し、できないところは教え合って練習する活動、一人ひとりが短い振り付けを準備してグループメンバーに教える活動、個々の振り付けにグループでの創作を加えて一つの作品にする活動、自分たちの作品にイメージを加えて踊り込み全員の前で発表する活動、発表した作品をビデオで鑑賞し評価する活動を行った。

「フォークダンス」では日本の民謡と外国のフォークダンスを2つずつ体験した。「フォークダンス」の特徴は、それぞれのダンスが民族や地域における歴史、風土、生活習慣、行動様式や心情が映し出された動き、ステップ、隊形、組み方等を持っていることである。フォークダンスを学習教材で扱うことは、各地域で受け継がれてきた定型の踊りを覚えて楽しく交流して踊ることである。その際にそれぞれのダンスの由来やダンスが生まれた文化や風土およびダンスのフォーメーションやステップを正しく理解して踊ることが重要であり、その点については確認を繰り返してできる限り時間を割いた。また、日本の民謡での身体の使い方やイメージに合った振り付けの経験、外国のフォークダンスでの多様なフォーメーションやペアでのダンスは、学生に新しい学びや感情を与えるものであり、「現代的なリズムのダンス」と「創作ダンス」の間に行うことが有効であると考えている。

### 2-3-2. 「創作ダンス」の経験

「創作ダンス」では、グループでゼロから作品を創り上げることを最終目標とし、それにつながるための導入活動を前半の4週で行った。

導入活動は、まず教師の振り付けを覚えて踊るところから始めた。これは、より自由な身体の使い方（踊り方）に触れること、流れをもった動きの一連を踊る体験およびそれと心の動きとの呼応を感じ取ることを意図した活動である。続いて学習指導要領の中から“対極の動き”を取り上げた。これは運動課題ともいえるもので、決められた運動にイメージを加えて運動を表現に変換していく活動である。そこで学生は、同じ動きでもイメージの違いにより表現が全く変わることを体験する。ある程度、創作ダンスへの心と身体の準備ができてきたところで“ダンスの動き作りの探求”という課題を行った。これは自分の身体により視点を向け、身体各部位の動きと表現の可能性を探るとともに細かい部位の動きとイメージをリンクさせることを求めた。この意図は、個々の表現の幅を広げるとともに動き作りの視点を増やすことであった。

毎回の授業において、全体でのウォーミングアップからグループ活動および創作へとスモールステップで進めることを意識した。また、一つの課題に対して必ず創作と発表・鑑賞を行った。

### 2-3-3. 創作ダンス作品のグループ創作

「創作ダンス」の後半の4週を使ってグループ創作を行った。この活動は、それまで行ってきたダンス授業の総括となる活動であるとともにダンス学習の特徴である課題解決学習を丸ごと体験できる内容で、15週の授業の中でも多くの比重を占めている。この活動で学生に求めたことは、選曲と編曲、振り付け・構成、衣装や小道具を自分たちで決めることであった（その際、音楽の候補曲だけは教師が選定し提供した）。学生が主体的にグループ創作を進めるために、各週で目指すべきゴールが設定された創作ノートを準備し、配布した。また、これまでの学習で習得した知識、技術だけでは作品創作に十分でないため、多様なダンス作品の可能性を示すため、高校生、大学生の全国大会入賞作品をいくつかピックアップして鑑賞させた。今年度の完成作品は以下の5作品である（「」内が作品タイトル）。



「明暗」



「学生の日」



「学生の日常」



「朝陽」



「信長の野望」

### 2-3-4. 鑑賞と評価

15週目に創作作品のビデオ鑑賞とそれぞれの作品への評価を自由記述の形式で行った。また、課題として学生にはレポートを課した。レポートは、これからの教師に子どもたちを能動的な学び手にすることが求められていることを踏まえて、ダンスの創作過程を「思考力、判断力、表現力」、「主体的に多様な他者と共同する力」の観点から考察して、学んだことをまとめさせる内容とした。



### 3. グループ創作を通じた学生の学び

#### 3-1. 思考力、判断力

学生の実験の体験として記述された思考力、判断力に関連する内容については、意見を出し合うこと、話し合いをすること、より良いものを選ぶこと、さらに良くするための工夫を行うこと等について多く書かれていた。以下にその内容を示す。

- ・どんな振り付けがいいのか意見を出し合い、その意見をみんなでよいものにするために考えて工夫する。そして最終的な決定を行う。
- ・教えられたことをただやるだけではなく、自ら考えることで独自に作り出すオリジナリティが生まれる。
- ・音楽からテーマを読み取り、振り付けを考え、それを表現する。本当にこれでいいのか、テーマを表現することができているか？思考し、判断していく。
- ・一人ひとりが振り付けを考え、それをどのように取り入れるかを思考したり、より良い振り付けの流れを判断したりする。
- ・選曲、曲から得られるイメージをグループ全員で話し合うことによって、思考力、判断力が養われる。自分の考えた動きをみんなに伝え、みんなが考えた動きを教えてもらい、この動きをこんなふうに変えてみたら、とお互いに意見を言い合って、思考力、表現力が養われる。
- ・周りと同じではなく、新たなアイデアを考えることが大切。
- ・仲間の意見や提案に共感できたり、意見を膨らませることができたり工夫を加えることでダンスの形が見えてきやすくなる。
- ・振り付けや構成、曲の編成など作り出すための知識と考える力が求められる。(ダンスの技術レベルも様々なので) 基準をどこのレベルにあわせるか、の判断が大切。

#### 3-2. 表現力

“身体表現”はダンス特有のものであり、学生は様々な視点からこれを捉えていた。また一方で自分の意見をみんなに対して表現する、という視点における指摘も見られた。以下に身体表現の観点と自己主張の観点からの意見を示す。

##### 【身体表現の観点】

- ・ダンスは自分を表現することや、作品のテーマやイメージを表現することに意味があると思う。
- ・身体や表情で感情を表現できると完成度の高いものになる。
- ・最初の頃は、ダンスの動きは何を表現しているのかあまり理解できず、ただ踊っているだけだろうという軽い考えであった。しかし、多くのダンスを見ることによって、それぞれのダンスには伝えたいことがあるということに気がついた。
- ・私たち自身も見る人たちに自分たちの考え、思いなどを伝えたいという気持ちが強くなり、そのためには踊りの中でしっかり表現するという大切さを学んだ。
- ・はじめは周りの目を気にしてしまい自分から表現することはできなかったが、時間とともに自分から表現できるようになった。
- ・ダンスに苦手意識があり、全身の隅々を使って踊ることができない人も多くいる。それは回数を重ねるごとに改善されることが多いが、全身を隅々まで使うことは意識しなければならない。
- ・ダンスが得意でない人も小さく踊るよりも大きく自信を持って踊ることで人に伝わると思うので、堂々と人前に立てるようにすることが大事。
- ・自分をダンスの中で表現することで楽しみや喜びを味わうことができる。
- ・発表を鑑賞し、それぞれが違うものを持っているということに気づいた。
- ・チームで何をどうすれば見ている人に伝わるとかというポイントを押えることが大切。
- ・頭から指先まで体全体で表現するのがすごく難しく、さらにそれをみんなで同じように踊るのがとても難しかった。
- ・人前で何かを表現することはとても緊張することで、緊張で思い通りのパフォーマンスができなかった経験も何度もした。しかし、それも場数を踏むことにより改善できるということも自らの体験で感じることができた。ダンスはそれにうってつけのものだ。

### 【自分の考えを相手に伝えるという観点】

- ・良い意見を持っているのにも関わらず、恥ずかしがって伝え損ねるといのはもったいないことだ。
- ・自分の考えや案を出すなど、踊ることだけでなく表現することが大事。
- ・授業の最初では人の意見に頼ってばかりであったが、授業を通して発言できるようになり、自分なりの振り付けの提案やアレンジができるようになり、積極的に参加できるようになった。
- ・お互いの振り付けを分かり合うために、まず言葉でどうするかを分かり合い、その後で身体でも分かり合わなければならない。
- ・イメージの捉え方に決まりは無く、自由である。自分が捉えたイメージをほかの人に共有することで相手にもいろいろな表現の方法があることを伝えることができる。
- ・自分を表現することが苦手な子どもはダンスを通じて表現力が豊かになるのではないだろうか。

### 3-3. 仲間との協働

仲間との協働は、思考力、判断力、表現力、主体性いずれにもつながっており、その点を含めながら指摘する学生が多かった。学生の記述からは作品の完成、苦手意識の克服、多様な感じ方の在りよう、グループで踊ることによって得られる充実感などの観点が見られた。

### 【作品の完成】

- ・キーワードは「仲間」。
- ・ダンスを完成させることは他人と協力しあわなければ成り立たない。
- ・グループのみならず個人の課題もグループのメンバーで助け合って、わからないところは教えあうことが大切だ。
- ・みんなが意見を出すことで新たな考えを知ることができる。
- ・良い物を創りたいと思えば自然と意見を交わす回数は増えていく。
- ・自分1人で作品を作っていくのではないし、他の人だけに任せて作品を作っていくのではなく、グループ全員で協力し、完成させていける。
- ・お互いが違うものを持っている中で、その表現を認め合い、協力していくことが必要。
- ・自分が感じたこと、ほかの人が感じたこと、同じような感じ方でも言葉にすると少し違ったように聞こえて、人の数だけ意見が出てくる。それを「そういった感じ方をするんだ」ということを学んだり感じたりすることができた。
- ・今持てる自分の力を提供したり、仲間からの新しい考え方を取り入れたりしながら作品を創り上げていくことができた。
- ・出された意見を否定せず「いいね」と盛り上げる、「もっとこうしたらどうかな」と付け足す立場だった。仲の良い人でも、あまり関わってこなかった人でも、一人ひとりの意見、表現を理解し、受け入れていくことが大切だと感じた。

### 【苦手意識の克服】

- ・ダンスは苦手意識があり進んでやりたいと思ったことが無かった。しかし、周りのみんなと協力しようと沢山話をする、恥じらいをなくすことで苦手意識は無くなった。
- ・みんなと教えあうことでダンスが苦手な子ども仲間と踊る楽しさを知ることができ、交流を深めることができる。

### 【多様な感じ方の在りよう】

- ・個人によって様々なイメージを持つため、自分の持ったイメージをグループ内で共有することで自分の持っていなかった感覚やイメージを知ることができる。
- ・一人がこうしたいと思っても、思ったまま進むわけではない。グループに発信し、話し合い、意見を交わしてからダンスは形になってく。
- ・自分だけの意見を一方的に押し付けず、他者の意見を尊重して聞くこと、言いづらい場合は質問したりして発言しやすい環境を作ることが大切。
- ・ダンスで一番難しかったことは他者と合わせることだった。それぞれの表現の仕方があり、感性が違う中では、まさに他者と協働する力が無ければ進展していかなかった。

## 【グループで踊ることのでられる充実感】

- ・一緒に踊っていて間違っているところを指摘しあったり、リーダーの合図に合わせて移動する場面であったり、仲間と力を合わせなければできないことである。
- ・踊る中で、みんなで動きをあわせること、カウントで順番にやることなど、人数がいるからこそできる。それをうまくやるためにも協力が必要。
- ・カノンやユニゾンなどはグループで協力することができ、きれいに踊れたときはとても達成感がある。
- ・振り付けはダンス経験者に任せたほうがレベルの高いものが出来ると考えていたが、実際創作ダンスに難しい振り付けは必要なく、チームで話し合い個々の考え・イメージを共有することのほうが大切であった。

## 3-4. 主体性

主体性は活動全体を促進するために必要とされる態度である。これについては、自分から考え、動くことの大切さや難しさを指摘した記述が多く見られた。また、創作過程のみならず創作後の展開をも含めた学習プロセスへの指摘が見られた。

## 【主体的に動くことの大切さ】

- ・どんなものがあるか自ら興味を持ち、知ることが大切。
- ・ダンスは、自分で考え、主体的、積極的に取り組まないと身につかない。
- ・受身になるのではなく自分から参加することで踊りに気持ちが込められるし、より良い表現になる。
- ・相手に気持ちを伝えるためには自分が主体的に多くの人とコミュニケーションを取るべきである。
- ・より良い作品にするためには、まず自分で考え、その後にグループで話し合っ協力していくことが大切。
- ・良い作品を作るためには、一人ひとりが積極的に活動に参加し、意見交換しあったり指摘しあったりする必要がある。全員が能動的になって作品を作ることが大切。
- ・主体的に動くことにより新しい考えを持つことができたり、より高い完成度のダンスを創り上げることができたりするということを学んだ。
- ・一人ひとりが主体的に考え、他者と協力して一つの作品を作ることが大切。受け身では創作活動は進まない。
- ・他者とのかわりを大切にすることが主体性につながる。
- ・学生がすべてを行うことによってグループ内で学生同士が活発に自分たちの意見を言い合うことができ、協力し合っ一つの作品を完成させることができる。

## 【主体的に動くことの難しさ】

- ・ダンスの創作で最も難しかったのが主体的になること。その要因は経験の少なさ、知識の少なさ、技能の低さだろう。
- ・(グループの人間関係により) なかなか積極的に意見を言おうとしないことがあった。言いづらさ、伝えるにくさがあったのだと思う。
- ・うまくできない人は、仲間に助けてもらう形でもよいので積極的に参加していく姿が大切。
- ・音楽やテーマを決めて進めていくうちに、少しずつ一人ひとりから意見が出るようになっていった。
- ・経験者に頼るのではなく、気になったことは話し合い、解決することが大切。

## 【創作後の展開における学習プロセス】

- ・自分たちで作った作品を発表し、評価することで自分たちの踊りはどうだったかなどを振り返るきっかけになり、次はこうしたらもっと良くなるのかなどを考えるようになる。

## 4. 考察

ダンスをゼロから創作する活動は、新しい学習指導要領が示す資質・能力の要素のうち、「知っていること・できることをどう使うか」そして、「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」

に合致する学習活動が多く含まれると考えられる。そして活動の際に最も必要となるのが意見交換、提案、取捨選択、合意形成の能力であろう。この点についてはほとんどの学生がその重要性を指摘した。

ダンス創作は「つくる」から始まる。続いて「おどる」、最後に「発表する・観る」である。学生の記述からは、いずれの活動においても思考し判断を行っていたことを読み取ることができた。このことから、学生は作品創作には多くの意見やアイデアが必要であり、そこから何を選択するか判断が重要であることを学んでいたことが推察された。さらに思考や判断を繰り返していたことも伺えた。したがって、思考と判断を繰り返し続けることがより良い作品創りにつながることを学び取ったと考えられる。またダンスの特色である身体表現に関する記述からは“何が良い動きか”を判断する視点が養われたのではないかと考えられた。つまり、技術的に優れているかどうかよりも、大きく表現すること、身体や表情で豊かに感情を表現できること、伝えたい思いを強く持っていること、その人らしい表現が表出されることが“良い動き”として大切であると理解したのではないかと考えられる。これらは観ている人に対する表現の観点である。一方、自分の意見を主張できることについても重要性が指摘された。これは、一緒に活動する仲間に対する自己表現能力を併せ持つ必要性の指摘である。表現の観点における2つの視点からの指摘からは、一つの学びから他の事柄への学びにつながる期待もダンス創作活動から得られる可能性を示すものと考えられる。さらに、これらの活動を充実させたり促進させたりするために仲間との協働、互いに認め合うことや理解しあうこと、主体的に取り組むことの重要性が指摘された。これは現行学習指導要領のダンス領域における「態度」に求められていることであり、実際に体験したことがその理解を深める助けとなるであろう。ところで、創作活動の前半では意見が出ず話し合いがなかなか進まない様子が見られることがあった。これに対して、主体的に取り組むことの難しさの要因として、グループの人間関係、ダンスの経験の少なさ、知識の少なさ、技能の低さを指摘した意見が見られた。その一方で、主体的になれない仲間への手助けの方法や必要性を指摘した意見も見られ、うまくいかない経験からグループワークを活発化させる視点や方法を自分なりに見つけ出すことができた学生もいると推察される。

これらの視点はダンスの特徴を踏まえた授業づくりに役立つものと思われる。したがって、これらを学生にフィードバックし、さらに自分たちで検討を加えさせることにより、よりよい手立てを導き出すための一助となるのではないかと考えられた。

## 5. さいごに

ダンスが学習者に本当の意味での価値を与えるのは、一人ひとりが自己を他者に開示し、自己表現が実現されたときではないかと考える。心身が満たされ、達成感が自信に変わり、集団の中での自分の存在を意味あるものとして捉え、他者の存在を尊重ようになる。この最終目的地に到達するためにはある程度の時間を必要とするが、その過程で教師が学生とともに一つ一つのステップを登っていくことが必要となる。課題解決型ダンス授業では、1時間の中で教師主導から徐々に生徒主体へと転換していく授業展開が求められる。教師主導の場面では合理的な授業展開、つまり、授業間のつながりを重視し、授業内においては意図的なスモールステップを組み立てるようにすることが重要である。一方で学生主体場面では活動促進のための介入が重要となる。学生の活動の停滞部分を読み解き、解決の方向性を示したり選択肢を限定する（もしくは与える）ようなアドバイスが求められるであろう。

本稿で報告した学生が学び得た内容は、受講する者としての視点である。したがって、これらのことを学生が教師の立場として改めてインプットし、指導としてアウトプットされることが求められる。



## 参考文献

- 村田芳子, 2008. 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは?—学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ—. 体育科教育 56(3):14-18.
- 中村恭子, 2013. 日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題. 日本スポーツ社会学研究 21(1):37-51.
- 八木ありさ, 2016. 教師も当事者となる獲得型の学びへ. 女子体育 58(4・5):4-5.
- 茅野理子, 2013. 栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について—ダンス必修化に関するアンケート調査から—宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 36:25-32.
- 松本奈緒、寺田潤, 2013. 男女必修化時代の中学校ダンス実施の現状と指導者の問題意識—秋田県中学校保健体育教諭の研修レポートを参考として—. 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門 68:25-34.